

第15回 ちゅうでん教育振興助成（平成27年度）

報告書資料 一般-49

学校名・団体名	新城市立八名小学校
HPアドレス	http://www.city.shinshiro.ed.jp/weblog/index.php?id=shinshiro06
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	学校を中心としたPTA・地域・児童の共同体づくり
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>学校を拠点として、学校と保護者、地域が連携・協力して子どもたちの教育に携わっていくことで、学校だけでなく、学校を取り巻く地域全体で共に子どもたちを育てようとする体制を整え、「開かれた学校づくり」を進める。そして、子どもたちも積極的に地域とのかかわりを広げ、ふるさとを大切にする子どもへと育てる。</p>	

<活動・研究報告>

1 PTAが協力し合って、子どもの成長を <休日親子ふれあい活動の開催>

(1) 親子ふれあい教室 7月4日(土)

今年度から休日開催とし、学校とPTAが連携・協力して運営にあたった。PTAや地域の方が講師として「親子ふれあい講座」を開設したりゲーム等の「体験コーナー」をつくったりした。「親子ふれあい講座」では、「防災食を作ろう」「木の椅子を作ろう」「親子でリトミック」「コンピュータ体験」など、PTAが講師や運営の中心となって活動した。また、保護者の経営している移動動物園に協力を仰ぎ、「親子でふれ合える動物園」を同時に開いた。地域にも案内のチラシを配付し、多くの人が楽しめるようにした。そのため、児童や保護者だけでなく、地域の方も来て楽しむ姿が見られた



親子ふれあい講座



ゲーム体験コーナー

(2) 子どもの育ちを助け、見守る休日開放

「親子ふれあい教室」を契機として、休日の運動場・体育館・校舎を開放し、希望する児童や保護者等が集まって、いろいろな体験ができるようにした。また、ボールやフラフープ、竹馬等をいつでも使用できるように設置した。

① 1学期の開放

親子ふれあい教室以外に、グラウンド・ゴルフ教室を計画した。地域のグラウンド・ゴルフ協会に講師をお願いした。その後、希望する児童やその家族を対象にして、月に1回、協会が本校の運動場で開催しているグラウンド・ゴルフに参加していくようにした。また、体育館は、使用がない土曜日を選んで開放した。親子でバレーをしたり、子どもたちがチームを組んでバスケットをしたりする姿が見られた。また、夏休みには、地域の子ども会が本校の施設を使って「防災フェスティバル」を開催した。



体育館開放



防災フェスティバル

② 2学期の開放

2学期は、1学期に行った児童や保護者の意見や希望のアンケートをもとに、内容を決定した。そして、引き続き「グラウンド・ゴルフ教室」を行うと共に「秋の寄せ植え講座」「和菓子づくり講座」「木工講座」「絵画教室講座」「リトミック」等を開設した。講師は、地域の方をお願いした。また、「ふれあい動物園」も開催し、案内のチラシを同じ地域のこども園や小学校に配付したため、本校の児童以外の園児等も来校し、親子で楽しむ姿が見られた。

③ 3学期の開放

3学期には、「絵画教室講座」を引き続き行い、さらに「花遊び講座」を開いた。また、「グラウンド・ゴルフ」も行った。親子で楽しく参加する家庭が増え、そして参加したPTAが自分たちで準備したり、会を進めたりして、自分たちで運営をしていく姿がみられるようになってきた。PTAの横のつながりも深まっていった。

④ 活動の広がり

グラウンド・ゴルフ協会と連携した月の第3土曜日に開いている「グラウンド・ゴルフ」に参加する児童が少しずつ増えてきた。また、学校開放が進むにつれ、いろいろな団体に活動が広がっている。子ども会が本校の施設を利用して活動することも多くなってきた。「防災フェスティバル」は、今年から始めたことで体育館や校舎、運動場を使用して、児童が一日楽しむ姿が見られた。さらに、子ども会が「ドッジボール」「サッカー」などを行事や大会に合わせて、学校で活動することが増えてきた。また、以前から活動している「空手」「野球」に加えて「バスケットボール」「バレーボール」に児童が参加するなどして、地域の方が地域の子どもに教える場として広がりを見せている。



和菓子づくり講座

休日開放も1回だけで終わるのではなく、継続して行いたいという参加者の声が多くでてきた。そのため、「木工教室」「リトミック」は2学期も計画した。そして、絵画教室は3学期まで続けることとなった。また、「寄せ植え教室」は作ったプランターの花が終わる5月頃、新しい花を植える計画を参加者たちが自分で立て、「春の寄せ植え教室」の開催を講師に交渉して、約束をしていた。

2 地域の力を掘り起こして学校へ

(1) わんぱく山の整備<共育支援隊>

学校の裏手には「わんぱく山」があり、自然がそのまま残り子どもたちの遊びや学習の場となっている。しかし、整備の手を入れないと、せつかくの環境が生かされないままである。学校から整備をしてくれる方の募集のチラシを配付したところ、それに応じた有志の方が集まって、その整備を夏休みに行った。枯れた木を切り倒して取り除いたり、危険な川やがけに行かないようにロープで周りを囲んだりした。



わんぱく山整備

(2) 学校生活での見守り<共育支援員>

本校はバス通学の児童が半分近く在籍し、バスの時刻まで学校に残って待つ子が多くいる。また、放課に比

較的教師の目が届かない図書室等で過ごす児童も見受けられる。そのような児童を見守る方として、「共育支援員」を募集した。1学期は、地域の方が来て、「スライド映写会」を毎週火曜日の授業後に開くようになった。また、2学期からは、それに加えて図書室を中心として活動する方も増えてきた。バスを待っている子を図書室に集めて、見守ったり、図書室の整備をしたり、子どもの生活支援をしたりするようになり、活動も自然と広がり出した。

(3) 学校教育への活用

毎週水曜日の朝に「英語活動」を位置付けている。その講師として、担任が行う英語活動の補助を2名の方が行っている。また、3年生を対象とした「交通安全教室」では、地域の交通安全協会の方がみえて自転車を乗る時の交通ルールの確認はもちろん、自転車点検もしていただいている。さらに、整備したわんぱく山を自分たちの遊び場にしようとして3年生が中心となって考え、「新城キッコリーズ」の方を招き、山の遊びを考えるきっかけとした。

3 子ども自身が地域とかわる

(1) 地域の方を学校に

新城市では、6月の第2土曜日を「共育の日」と定め、市内の全学校を公開している。本校の児童は、自分たちの生活を見てもらおうと地域の方や保護者、祖父母等に招待状を書いて出すようにした。すると、例年よりも多くの方が来校した。そして、運動会や学習発表会等の行事にも合わせて、子どもたちは自分たちで来てほしい人に招待状を出すようになっていった。このため、地域の方や今まで来ていなかった祖父母等が来校し、昨年よりも多くの方が学校に足を運ぶようになってきた。

(2) 地域との交流を広げ、結びつきを強める

「共育の日」に合わせて、自分の近くの家の「グループホーム」や母が働いている「老人福祉施設」にも招待の手紙を出す児童がいた。招待状を受け取った施設のお年寄りが多く来校した。それをきっかけにして行事に合わせて招待し、交流を深めていった。また、2年生は、近くの老人福祉施設「寿楽荘」へ2回、訪問した。子どもたちはお年寄りが元気になってほしいと願い、老人とふれ合ったり、学習発表会で行った劇や演奏を披露したり、さらに結びつきを深める姿が見られた。5年生は、自分たちの作ったお米を地域の老人福祉施設に届ける活動を行った。子どもたち自身の力で、地域との結びつきを作り、広げ、深めていく姿が見られた。



(3) 自分たちの手で学校環境をつくる

4年生の子どもたちは、移動動物園の方に手紙を出し、学校の空いている飼育小屋に動物を連れて来てほしいと交渉した。動物が学校にいと、自分たちの生活が楽しく豊かになると考えたからだ。経営者が学校の保護者でもあり、子どもたちからの願いでもあったので、2月から週に1日の割合で動物が来ることになった。子どもたちは「八名っ子アニマルパーク」と名付け、その日を楽しみにしている。



(4) 地域への感謝

自分たちの生活を見つめ直し、地域の方の支援に対して感謝の気持ちを「ありがとう集会」を開いて伝えた。学校支援員の方や地域のスクールガードの方を中心として、直接子どもたちから感謝の心を伝えられ、学校にかかわってくださる方も活動への達成感につながった。

4 おわりに

学校開放が行われるにつれて、休日を親子でたのしむ時間にする家庭が増えてきている。また、各家庭の横のつながりも深まり、参加した家族同士が楽しく過ごす姿が見られるようになってきた。来年度も計画してほしいという声が多く出た。また、学校だけでなく、地域の自然などに親しむ機会をつくりたいと考えている地域の方や特産品を知って欲しいと願う地域の農家などが出てきている。学校だけでなく、活動が地域へと広がることも考えている。学校支援では、今年度に活動の核となる「共育支援員」の方が確保できた。来年度は、さらにその方々を中心にして、活動を広げていきたい。子どもと保護者を地域全体で支えていってきたい。

また、地域に支えられている子どもたちに対して、ふるさとを大切に思う気持ち育てていきたいと考えている。そのためには、自分たちが支えられていることを実感するとともに、地域との関係を自分たちの力で深めていく活動が大切であると考えている。今後、学校の中心的存在である子どもたちが主役となって、地域への発信を行い、地域との関係をさらに深めていくことができるとよい。